東筑摩塩尻教育会長　様

学校名　筑北村立聖南中学校
氏　名　中村　淳志

令和６年度　県外（県内）視察報告書

視察先所在地　〒110-8712 東京都台東区上野公園１３－９
視察先機関名　東京国立博物館

○　視察テーマ
教師の鑑賞力向上～生徒が文化財の魅力を感じることができる授業づくりのために～

○　視察報告
１　東京国立博物館の学芸員の講義から
（１）「『神護寺』鑑賞のポイント　―ホンモノを見ることの意味―」教員が鑑賞力を上げることで生徒に文化財の魅力を伝える
①美術鑑賞の楽しさと難しさを乗り越え。鑑賞力を高める
芸術鑑賞は、音楽鑑賞や料理と異なり、自力でどこまでたどり着けるか、という難しさがある。芸術鑑賞は言葉ではなく、イメージを読み解く力が必要だからである。この講義では鑑賞力を上げるコツを学んだ。
コツの一つは、美術史の知識で、「神護寺」に出展された薬師如来像を例にした解説を聞いた。薬師如来像は日本彫刻史上最高傑作と言われることもある像で、重量感を出すための工夫として、鼻筋と足の位置をずらし、違和感を出すことが凄みを出している。左右対称で身体のバランスが良く、人体の理想とも言える美しさがある東大寺の不空羂索観音立像と比較すると、明らかな違いが見て取れる。このちがいを生む一つの要因は、像の造り方にあり、一木造の薬師如来像と、乾漆造の不空羂索観音立像の違いを読み取ることで鑑賞力が大きく上がるとのお話しだった。他にも両界曼荼羅から見る線の美しさや、平安時代の釈迦如来像と鎌倉時代の仏像を比較した表現の違いを学んだ。
②ホンモノ・オリジナルを見ることの大切さ
科学技術が発達した現代では、写真やデジタル資料で本物の文化財を見ているように作品と出会うことができる。しかし、本物の作品を見ることでしか大きさや、本当の色、質感は味わうことができない。また、歴史的人物が実際に見たり触れたりした作品と、実際に出会うことで感じることもたくさんある。名作と言われる作品に出会うことで、見る目が養われ、さらに興味を深めることにもつながる。
本講義を聞き、教師が鑑賞力を高め、生徒に感動を伝えることで、文化財に興味を持ち、実際に見てみたいという気持ちを育てることができると感じた。美術館や博物館で鑑賞したいという生徒を育てることで、長年受け継がれてきたたくさんの文化財を次世代に伝えることができるという視点からも、歴史的な文化財に興味を持てる授業を目指したいと、さらに強く考えるようになった。

（２）「仏教に関する文化財を活用した児童生徒へのアプローチ」文化財から時代を読み解く

①仏教に関する文化財の細部を読み解く

２つの目の講義では、仏教に関する文化財をどのように読み取り、どのような問いで生徒を考えさせるかを学んだ。

まず文化財の写真から、生徒の立場になって学芸員の方の問いから考えた。1 つ目は重要文化財の金銅八仏種子五鈷鈴を見て気づくことは何かという問いに、「細かい装飾がたくさんある」「字のようなものがある」という気づきがある。また、「何に使われたのか？」という問いに、形から「音を出すもの」「呼び鈴のようなもの」と予想ができた。ここでさらに「呼び鈴には必要ないのに、こんなに細部にわたって緻密で豪華な装飾を施したんでしょう？」と問われた。学芸員の方は、施設訪問に来た小中学生に、このような問いをするそうだ。「いつ作られたか」「何に使われたか」「誰が作ったのか」という問いは、調べればわかるもので、文化財から離れてパソコンと向き合ってしまう。しかし、「どうして」という問いを投げかけることで、生徒は文化財をじっくり眺めたり、近くの友達と話したりして学びを深められるかもしれない。同時代の文化財として他に無量義経断簡と、経帙（神護寺一切経）でも同じような問いについて作品の細部を見ながら考えた。これらが作られた平安時代は、特に貴族が現世での幸福や社会の安定を密教の祈祷に頼っていて、資料集には中宮彰子の出産の時に祈祷している様子が描かれている絵巻もある。文化財とじっくり向き合い、そこから生まれた「なぜ」から時代を読み解くことができることを、具体的な文化財から考えた。

②歴史分野の文化の学習で文化財をじっくり読み取る意味

文化の単元では、重要語句や人物名がたくさん登場し、問題集やテストでも出題されることから、知識を身につけることが中心になってしまうと感じる。今回例として出された文化財は国風文化の範囲になるが、教科書でみると、ここでは紫式部や清少納言などが中心となり、仏教に関する記述は、わずか 8 行程度である。今までは仏教に関する文化財は文化に該当していると考えていたが、この講義を聞き、仏教と密接にあった奈良時代や平安時代の政治や人々の生活に関するところで文化財を読み取り、学びを深めることができると学んだ。

３　生徒の心を動かすためにできること

美術館や博物館で芸術鑑賞することは楽しく、興味がある展覧会に時々足を運んできた。また、授業の中で、自分が実際に見たものの魅力を話すと、生徒から「私も見てみたい」という声を聞くこともできた。しかし、好きなように、感性で自由に見ることには限界があったと感じ、もっと魅力を生徒に伝えたい、美術館や博物館に行くことの楽しさを感じてほしい、という思いから研修に参加した。前半の講義の終わりに、芸術鑑賞の力を養う最も有効な方法は、詳しい人の話を聞くことだ、という話があった。この研修を聞いてそれを実感した。講義の後に特別展示を見ると、無意識に展示物の細部に目を向け、他の仏像と比較する自分がいることに気がついた。さらに、購入した図録を帰宅後に家族に見せながら語るなど、作品に魅了されていることに気づかされる。熱意と知識がある人から直接魅力や背景を聞くことで、芸術鑑賞は何倍も楽しいことがわかり、自分が経験したことを生徒にさせられたらどんなに素晴らしいことだろうと思う。歴史の授業で、文化に興味を持ってもらおうと、感動してもらおうと工夫をしてきたが、仏像などの仏教に関する文化財を細部まで見つめることはなかった。東京国立博物館が進めているデジタル資料を活用し、今までに購入してきた図録も使い、文化財がもつ魅力を一緒に味わいながら、生徒が感動と出会う授業を目指したい。